【お寺シリーズ】

浅井了意関係資料についての報告（一）

和田恭幸

浅井了意の伝記については、野間光辰氏、北条秀雄氏らの精緻なる御論考が具わる。すなわち、野間光辰氏著「了意追跡」（北条秀雄氏著『改訂増補浅井了意』所収）、北条秀雄氏著『改訂増補浅井了意』（「笠間叢書」二六・笠間書院・一九七二年三月）、同氏著『新修浅井了意』（「笠間選書」一一・笠間書院・一九七四年九月）等である。また、かつて了意が住職をしていた正願寺（京都市）の所蔵資料については、高野昌彦氏「浅井了意をめぐる正願寺新出資料について」（『同志社国文学』五七号・二〇〇二年一二月）に詳細なる調査・研究報告がなされている。

さて、衆知のことながら、了意は摂州三嶋江の本照寺（東本願寺末）の一子として生を享けた。父の弟西川宗治（了意の叔父）は、顕如（本願寺第十一代）の代に本願寺の家臣となった。東西分派後、教如（東本願寺初代）に取り立てられるも、藤堂和泉守方に出奔。これによって、了意の父は本照寺の住職を罷免され、寺地も召し上げとなった。ここから先は、近世文学の諸研究に云う所謂「僧侶浪人浅井了意」の人生が始まる。

ところで、寺地召し上げの後、本照寺の本尊や建物はどうなってしまったのだろうか。野間氏の「了意追跡」によって知られる事柄は、同寺が後に再興され、その寺院が現在の碧流寺（真宗大谷派・大阪府高槻市三島江三丁目）だということである。そして、野間氏は「現在の碧流寺には、本照寺の遺物らしきものは何一つとして残ってはゐない」（『改訂増補浅井了意』二四五頁）と述べられる。

実をいうと、野間氏が碧流寺を来訪された後、御住職の三牧文弘師が本照寺の什物を複数発見され、爾来それらを丁寧に整理され、今日まで大切に護持されてきたのであった。なお、野間氏が同寺に来訪の際、対応なされたのも三牧文弘氏である。

二〇二二年に私が拝見させていただいた寺宝は、本照寺の本尊（木像）と台座、複数の絵像である。そして、碧流寺として再興された後の古文書と典籍類を併せて拝見させていただいた。木像と絵像が碧流寺に伝えられているということは、本照寺という寺号を消

失した後、何もかも破却されたというわけではなく、再興されるまでの間、住職のいない道場のような形で残されていたのかもしれない。

さて、今号には、本照寺の銘を有する本尊の台座を紹介する。台座といっても、蓮台・光背付きの五重座や七重座ではなく、木像を蓮台・光背付きの台座に接合した状態のものを載せるための台である。了意が生まれた頃、本照寺の本堂の荘厳（しょうごん）がどのような形式であったのか一切知ることはできない。ただし、以下に記す寸法を勘案すれば、それほど小さな本堂ではなかったようである。

なお、本照寺の本尊は、現在美しく修補され、内仏（ないぶつ）（庫裡に安置する仏壇）の本尊として護持されている。そのため、採寸等の調査は辞退させていただいた。

■本照寺本尊台座

一、形状等　六角（六角錐）。総金箔、天板には箔押し及び塗装無し。

一、寸法　天板、四〇・八cm×三八・二cm。高さ、四一・六cm。

一、銘　「摂州芥川郡三嶋江村／本尊　本照寺」。天板に二行書きで墨書。

■台座の天板

■台座の正面